慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『高齢化社会と日本人の生き方： 岐路に立つ現代中年のライフストーリー』 書評論文リプライ
Sub Title	
Author	小倉, 康嗣(Ogura, Yasutsugu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.129- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『高齢化社会と日本人の生き方——岐路に立つ現代中年のライフストーリー』書評論文リプライ

小倉 康嗣

わが国におけるライフストーリー研究の第一人者であり、この領域の開拓者のおひとりでもある小林多寿子さんに、本書に込めた意図を細部まで、行間にしたためた思いまでも真摯に受けとめ、繊細に汲みとっていただき、深いご理解と貴重なご意見をいただいたことに、私は感極まる思いである。そして、そんな誠実な読み込みから生成的な問いかけをしてくださったことに、心からのお礼を申し上げたい。また、このような貴重な機会を与えてくださった編集委員会のみなさまにも、あわせて感謝申し上げたい。

本書の手法に込めた意図や、その根っこにある学問姿勢（社会学観）とその意義については、小林さんが、著者の私からしてもこれ以上ないほど的確に、そして鋭敏に指摘してくださっている。あえて私がこれ以上申し上げることはない。あとは、その意図・意義を全うすべく行なった分厚い記述の「細部に宿る魂」を、本書本体を通して感じとっていただけたら幸甚である。

ただ、ひとつだけ強調しておくとすれば、小林さんも指摘してくださった、いわば作品提示論にかかわることである。

研究対象だけでなく、研究対象に向かう著者（調査研究者）自身の生活史的経験や動機、そして研究対象との関係のとり方までも含めた〈経験の実践のプロセス〉としての調査研究過程それじたいを、社会過程の一部として研究のフィールドに入れ込んで、どのように検討し、いかに作品化して提示するか。そして、重層的な読者（作品の受け手）とどのようにコミュニケーションし、研究の社会的実践性を作品としていかにパフォーマンスするか。本書は、そのひとつの試みであり、実践例である。

しかし、それを発表できる場（ルート）を得るまでには、いくつもの現実的な困難があった。その困難をめぐるエピソードについては本書の「あとがき」でもすこし触れたが、ここで指摘しておきたいことは、上述のような〈経験の実践のプロセス〉としての調査研究過程が研究知見と不可分だとし、それを研究の枠内に組み入れる必要性が議論としては論じられてきつつある一方で、それをトータルに実践・作品化して発表し、検討できる場（ルート）が、学問活動の制度的にも媒体的にも形式的・手続き的な制約があり、十分に確保されていないという実情である。

小林さんがその意を汲んで「なによりも実験的な、あるいはむしろ挑戦的なといったほうがよい作品化の試みへの意欲」と評してくださったが、その「意欲」は、そうせざるを得ない困難な状況から必然的に生まれたパトスであった。調査研究の実践や記述方法をめぐって昨今議

論されていることに実質的に向き合っていくためには、このような作品提示の場（ルート）の開拓の問題も、あわせて考えていかなければならない時期にきているのではなかろうか。それは、誰に向かって、何を語るのか（研究作品の受け手をどう考え、どのようにコミュニケーションするか）という問題にも連なっており、研究（社会学すること）の社会的実践性をどう考えるか、という根本的な問題にかかわってくることでもある。

さて、小林さんからはふたつの問いかけをいただいた。十分な応答ができるかわからないが、試みてみたい。

ひとつめは、〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉概念についてである。「『下降』『有限性』『喪失』『依存』『弱さ』『非合理性』という生の局面を含む『老』『病』『死』へ向かう人生後半をいかに意味づけるか」が一人ひとり（全世代）の「生き方」の問題として問われてくるなかで、「生涯にわたるエイジング・プロセスの生成に〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉概念がいかに布置されるのか」という問いかけである。

私は、エイジングの問題は、突き詰めていけば、その根本において《生きる意味（存在の意味）》と《いのちの連続性》の問題に集約されていくと考えており、そこに〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉概念が布置される。

「『下降』『有限性』『喪失』『依存』『弱さ』『非合理性』という生の局面を含む『老』『病』『死』へ向かう人生後半」とは、まさしくエイジングの意味地平である。それをいかに意味づけるかが問われるとき、「一定の役割の獲得と維持＝人間形成の完成」といった、生産性に寄与する「壮年」に中心的価値を置く機能合理的な人間観を超えた地平で、人間存在（タテのつながり／ヨコのつながり）を捉え直していくことが要請されてくる。なぜならば、生産性に寄与する「壮年」に中心的価値を置く機能合理的な人間観では、「壮年」以後の人生後半期は無価値に向かうプロセスとして意味づけられてしまうからである。そこでは、さまざまな役割や機能を「喪失」していく「下降」のプロセスを肯定しうる（そこに意味や価値を見出しうる）人間観とその存在論が問われてくる。別の言い方をすれば、機能合理的な一貫性のなかで何かを《すること》ではなく、「弱さ」や「依存」を背負った「非合理」なゆらぎのなかで生きて《いること》そのものを無条件に肯定していく思想や文化が問われてくるといってもよい[1)]。

そしてそれは、「高齢者」という特定の人たちだけの問題ではなく、《生きる意味（存在の意味）》をめぐる私たち（全世代）一人ひとりのモノサシ（ものの見方や人間観）の根本的な転換を含んでいるという意味で、「生涯にわたるエイジング・プロセスの生成」に密接にかかわってくる。その意味で、現代日本の中年世代の人びとは、社会の高齢化という歴史時間の転換期と、人生後半期への突入という個人時間の転換期の交差点に立ち、モノサシの転換を含んだ「生涯にわたるエイジング・プロセスの生成」のただなかにいる。本書では、そういったなかでの新たな《生きる意味（存在の意味）》の生成プロセスを、現代中年のライフストーリーを通して描いたのであった。

では、そこで見出された「生産性に寄与する『壮年』に中心的価値を置く機能合理的な人間観を超えた地平」での人間存在の捉え方とは、どのようなものであったのか。

切り詰めていうならば、それは人間存在を生命＝自然的世界の長いかかわり合いのなかで捉え直していくというものであった。本書に登場した現代中年は、人生後半を生きていくなかで、「下降」「有限性」「喪失」「依存」「弱さ」「非合理性」を感受する葛藤経験や挫折経験、「病い」や身体のままならなさの経験をとおして、機能合理化した社会から外れていく生を経験していた。その経験は、それまでの自己（そして社会）にとっては異質（非自己）な経験であり、ゆらぎであるけれども、それを自然的な意味地平にとり込み、新たな自己（そして社会）の源泉として捉え直していくような生の営みがそこにはあった。それは、機能合理的な一貫性というよりも、「非合理」なゆらぎの連続性によって、文字どおり（完成や定着ではなく）「生成」していく人間存在のありようであった。

だが考えてみれば、そもそもそのような経験をもたらす「老」「病」「死」とは、身体に集約された「内なる自然」であり、自然なことであったはずである。しかし、その自然な「老」「病」「死」を機能的に処理すべき対象とし、不自然化してきたのが近代産業社会の機能合理的な人間観であった。

生命経験・身体経験・生活経験の積み重なりとしての〈経験〉は、このような、それまでの自己（そして社会）にとっては異質（非自己）な経験をもたらす「老」「病」「死」が、自然という意味地平にふたたび（再帰的に）とり込まれていくゆらぎの連続性（これこそまさにエイジング・プロセスである）のかなたに感受されてくる。この山型括弧つきの〈経験〉とは、40億年のいのちの歴史（本書に登場した調査協力者の言葉でいえば「細胞の記憶」）を背負い、「老」「病」「死」という「内なる自然」を内包した「生きもの」としての人間存在の自伝であり、生きて《いること》そのものを意味づけ・価値づける地平である。

さらに、このような《生きる意味（存在の意味）》の捉え直しは、エイジングのさきにある「死」＝「有限性」（限りあるいのち）の自覚を契機としており、新たな《いのちの連続性》の模索へと連なっている。本書に登場した調査協力者である阿川さんの「歴史」、馬場さんの「道」、千葉さんの「いのち」は、まさしくその位相において生成されてきたカテゴリーであった。それは、〈経験〉を介して、機能合理的な「生殖性」を超え出る40億年スパンの「世代継承性」のストーリーを構成するものであり、私はそれに「ジェネラティビティ」という言葉を当てたわけである。

また、この「ジェネラティビティ」のストーリーは、〈経験〉を「学ぶ（真似ぶ）」ことによって生成されていた。その学びは、主知主義的な枠を超えて、詩学的な象徴的構想力でもって老いの「非合理性」を包摂し、「下降」「有限性」「喪失」「依存」「弱さ」といった機能合理性に収まらない意味層を「生涯にわたるエイジング・プロセスの生成」へと媒介するものであった。ここで、自然世界（＝〈経験〉）の創造的模倣（＝学び）によって、それを象徴的世界へと変換するという語義の沿革をもった「ミメーシス」概念が浮上した。そしてこの〈経

験〉のミメーシス的な学びが世代間にわたるとき、生きて《いること》の地平において、私たち一人ひとり（全世代）の「生き方」としての「生涯にわたるエイジング・プロセス」が生成されていく、と考えた。

社会のエイジングから再帰的に浮上した個人のエイジングは、そのかなたに生命＝自然のエイジングを感受し学ぶ。そこからふたたび「生涯にわたるエイジング・プロセス」が新たな意味づけのもとに生成されていく。それを〈〈経験〉のミメーシス的ジェラティビティ〉と概念化し、エイジングの意味地平に布置したわけである。

じつは、この〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉は、本書と読者のあいだにおいてもそれがパフォーマンスされるよう企図しているという点で、本書の手法（研究作品の社会的実践性）とも密接にかかわっており、小林さんからのふたつめの問いかけに交差している。

小林さんからのふたつめの問いかけは、「３人の現代中年のライフストーリーで描き出し得たものをいかに『日本人』にまで接続させていくのか」。３人の現代中年の「個性あふれる個々の『生き方』と『日本人の生き方』とのあいだを結ぶ筆者の論理の展開」についての問いかけであった。

小林さんが指摘されたように、本書はD. プラースの名著『日本人の生き方』から多くを学び、影響を受けている。しかしながら、本書のタイトルの「日本人の生き方」は、プラースが採用したような、調査対象として「中流階級に属する中年の日本人の大多数を『代表している』」「平均的日本人」（上掲書 p. 45）を据えることで「日本人の生き方」に接続していくという論理で付けたものではない。むしろ本書は、「少数派」の事例であっても、〈再帰的近代としての高齢化社会〉という「変革期」としての歴史的社会的状況のなかでの新たな現実構成（変化の兆し）を探索していくために、本書の基本的視角である〈ラディカル・エイジング〉の視角から「意味を担った対象」を意図的にとりだしていくという方法論理を採用している。

ところが、そういった方法論理から調査研究を進めていったら、思いがけず日本人の生活文化的伝統に「お目にかかり」（調査協力者の馬場さんの言葉）、古くて新しい生活文化の「可能態」として感受された、という生成プロセスが展開されたのである。

たとえば、調査の手がかりとなった〈意味感覚としての隠居〉や、３人の現代中年のライフストーリーに出てきた「自然」「道」「縁起」ないし「いのち」の捉え方、さらにそれらを発展させて結論部で提示した〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉といった概念は、仏教思想をはじめとする日本の生活文化的伝統が生成してきた古くて新しい「生き方」「ものの見方」の地平に通じている。それが、「老」「病」「死」を機能合理的に処理し、その意味や価値を矮小化してきた近代産業社会の人間観やその人間観にもとづいた論理実証主義的な社会認識を相対化し、同時に、ポストモダン思想が近代合理主義に突きつけた批判を受けとめたあとで「どこに向かえばよいのか」という着地点（存在論的基盤）の経験的探究に連なっていく可能性をもっているものとして、感受されたわけである。

またその地平は、調査研究者の〈経験〉、調査協力者の〈経験〉、そして読者の〈経験〉が地続きとなった場からの〈述語的再帰性〉による新たな了解の生成が「生成的理論」の要諦であり、それが研究の社会的実践性である、という本書の手法にも重なり合ってくることに気づかされた。たとえば日本の生活文化に根ざした仏教語でもある「縁起」という発想は、ここにいうような〈経験〉の「地続き」性を再帰的に自覚した見方と通じている（本書の「あとがき」に「『縁起』としての社会調査、『縁起』としての研究作品」という副題を添えたのは、そのためである）。

ただし、それが「了解可能な存在へと完成（生成）」していくのかどうかについては、本書で行なった作業をさらに展開し蓄積しながら、それを調査研究者、調査協力者、そして読者を含めた相互主観的世界での「批判的討議」（ただし、もはやこの「批判的討議」は主知主義的な対話に限られるものではなく、詩学的な象徴的構想力を含めた〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉にまで拡げられた概念として捉え直されることになる）に委ねていくしかない。

つまり、本書のタイトルに掲げた「日本人の生き方」とは、本書と読者のあいだの〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉によって育まれる「可能態」であり、そこにK. ガーゲンがいったような「実証から実践へ」という意図が織り込まれているわけである。

【註】

1) この点については、本書に対して「生きていることを無条件に肯定することを、これまでの社会学はやってこなかったのではないか。それをこの本ではやっているのではないか」という示唆にとんだコメントを、新井智浩さんからいただいた。記して感謝したい。

（おぐら　やすつぐ　立教大学ほか非常勤講師）